



広島オリーブ会

オリーブひろしま

広島オリーブ会会報

第11号

2005(平成17)年5月28日発行
 広島オリーブ会
 事務局・☎730-0031
 広島市中区紙屋町1-2-22
 (株)ガリバープロダクツ内
 電話・082(240)0768
 F A X・082(248)7565

広島オリーブ会設立二十周年を記念して… 母校のシンボル、オリーブの木を橘香会の記念植樹横に

二〇〇四年十月三日(日)朝九時三十分、織田会長、杉ノ原初代会長、野坂前会長、大成副会長、佐藤副会長、植樹の労を担われた阿鷹先輩、碑文を書かれた西原先輩とともに、記念植樹を行った。当日は、広島オリーブ会の二十周年を共に祝うかのよりに快晴であった。
 (文責27回生・大森富士子)



オリーブを植えるの記

4回生・阿鷹 満州雄

た。何をどこへ、いつやるのか、堂々巡りの末に樹木はオリーブ、場所は適当なところを探すことにして、記念植樹をやるうと決まった。

オリーブは、母校のシンボル樹、常緑樹の美しさと花の芳香は庭木として、観賞価値も十分にあり、栽培条件にも問題はない。自家受精はしないものの、複数の品種を植えれば、果実も期待できることが分かり、園芸店や造園業者を巡って見れば、いろいろな品種があまり高くない価格で販売されていた。

次は場所である。母校の母体のひとつである山中高等女学校跡の碑が、広島市中区千田町二丁目千田第一公園内にあることが分かった。下見に行ってみると、立派な石碑と、その同窓会「橘香会」にちなんだ柑橘が植えられ、周囲の植え込みに

も余裕があり、適地と思われた。

五月二十九日の第二十回広島オリーブ会総会において、設立二十周年の記念行事として、オリーブを植樹することが諮られた。その結果、記念植樹への賛同と、来賓の方を含め多数の出席者から予想以上のカンパが寄せられた。これで全てが決まり、六月の初めに中区役所管理課に行き、千田第一公園内に記念植樹できるかどうかの相談をした。その結果、「寄付申出書を提出していただき、内部協議をして返事したい」とのことだった。「広島オリーブ会設立二十周年記念の植樹を行い、美しい公園づくりと、利用される方に潤いをもたらすため、高さ二メートル程度のオリーブ二本を植える」ことを目的として、寄付申出書を提出した。

すぐに、OKの返事が出せ

るような雰囲気だったが、七月になってやっと寄付領収書が送られてきて、「公園内にオリーブを植えてもよい」となった。しかし、すでに盛夏のような暑さのため、植え付けは九月中旬以降とし、夏休みに入ることにする。

七月の幹事会で最後の打ち合わせを行い、植えるための地拵えからオリーブ苗の購入、植え付けを一手に引き受け、あれこれと多忙な会員方の手を煩わさないことにした。ただ、記念植樹を表す表中の揮毫については、仮名釘流の私流ではまずい。西原征彦さん(五回生)が以前色紙に達筆をふるわれたことを思い出し、お願いした。

これで準備万端整ったので、九月二十八日にオリーブを植え、十月三日には会長、副会長など会員の有志が集まり、標柱を立てて記念植樹を終わった。願わくば、この地でオリーブが大樹となり、地域住民の方々と異色のたわわに実った果実の収穫を行うなど、楽しいイベントが生まれることを望みたい。



広島オリーブ会ができて二十年、月日の過ぎゆくのは早いもので、一昔もまえのことになる。

年間六回の幹事会は世話役の努力の賜物、今年も居酒屋巡りで楽しいお酒を飲みながら開催されている。三月、四月の議題は総会の準備などで、二〇〇四年は広島オリーブ会の活動が二十年の節目になったことから、記念行事をやってはと提案があった。

やることについては賛成多数。何をやるのか名案がなく、いろいろ候補の中から記念植樹はどうだろうかという話になっ

碑文を書く

5回生 西原 征彦

幹事会で、酔った勢いもあり、「広島オリーブ会設立二十

周年記念」植樹の碑文(木製の碑)を書くはめになってしまった。「滲まないように木面にチヨークを塗るといいよ」「墨汁だと雨ですぐ流れるから膠で固めた墨を磨って書かないと駄目だよ」などなど色々なことを教わった。

私が書く所次はなく誠に僣越なことになってしまったと後悔している。



お願い
 住所の変更を、事務局のご連絡ください。近況や作品・集いの呼び掛けも、ご投稿ください。送り先は事務局。(表紙題字横に連絡先)

「橘香会」広島オリブ会の客員へ

母校の母体と共に歩むことに



昨年の八月二十七日(金)、織田会長のご好意によりお借りした広島銀行本店の会議室において、橘香会が広島オリブ会の客員となる調印式が行われた。橘香会からは五名の皆さんが出席され、原総子副会長より「これからは客員としてよろしくお願いします」と広島オリブ会の後藤副会長に、同意書が手渡された。これにより、二〇〇五年度から総会は「橘香会」との共同開催となり、母校の母体の一つである先輩方と触れ合う機会が増える。その他のイベントにも声をかけてほしいとの要望もあり、今後ますます広島オリブ会の活動の幅が広がります。

母校の歴史を紐解く上でも、今後、さらに「橘香会」の皆様に色いろお教えいただければと願っている。
(文責 27回生・大森富士子)

原爆死没者慰霊祭



広島に原爆が投下されて五十九年目の二〇〇四年八月六日、広島女子高等師範学校、福山付属の前身の同付属山中等高等女学校の原爆死没者慰霊祭が、広島市役所に近い中区国泰寺町一丁目の荒神堂境内の慰霊碑前で、しめやかに営われました。

橘香会(山中高女卒業生の会)や遺族会、広島オリブ会(地元町内会の有志など約)二百人が参列。母校からも副校長の広澤和雄先生、三宅幸信先生と学友会執行部の生徒たちも出席し、犠牲者の冥福を祈りました。慰霊祭では、当時、山中高女三年生で動員先の三宅製針で被爆し、生死の境をさまよった松井サホ子さんが、呉市の保育園児らと一緒に折った千羽鶴を捧げました。続いて、被爆者の祖母をもつ学友会長の富士田通子さんが「周りの人々を思いやる心を持ち続けながら、平和に向かい合っていきたい」と、誓いを新たにしました。

当時、山中高女は一、二年生が旧雑魚場町で建物疎開作業中に被爆し、三人を残して全員が死亡。市内の重需工場に配属された三年生も半数が被爆しました。(19回生・山内 雅弥)

春のコンペ (5月29日)

1 井上 泰之	88	20	0	68	0
2 吉岡 了	89	19	0	70	0
3 増田 正浩	90	20	0	70	0
4 桑田 裕士	90	18	0	72	0
5 定本謙一郎	90	17	0	73	0
6 児島 泰典	92	18	0	74	0
7 浜田 紘一	91	20	0	74	0
8 佐藤 稔	95	20	0	75	0
9 宇野 宏	100	25	0	75	0
10 白川 忠暉	90	14	0	76	0
11 大成 浄志	99	20	0	79	0
12 大成 洋子	115	36	0	79	0
13 光波 康壮	115	36	0	79	0
14 岸本 益美	116	36	0	82	0
15 辻本 清	124	31	0	83	0
16 佐藤 克則	124	31	0	83	0
17 藤井 洋	108	19	0	89	0
18 越智 正紀	111	20	0	91	0

秋のコンペ (9月11日)

1 児島 泰典	90	18	0	72	0
2 佐藤 稔	92	20	0	72	0
3 白川 忠暉	87	14	0	73	0
4 大成 洋子	109	36	0	73	0
5 打江 功	93	19	0	74	0
6 桑田 裕士	93	18	0	75	0
7 織田 瑠治	107	31	0	76	0
8 岸本 益美	112	36	0	76	0
9 大成 浄志	97	20	0	77	0
10 外林 諭吉	99	20	0	79	0
11 佐藤 克則	115	36	0	79	0
12 井上 泰之	96	16	0	80	0
13 藤井 洋	100	19	0	81	0
14 浜田 紘一	110	20	0	90	0



エルミタージュ美術館展を觀賞して
広島オリブ会副会長 後藤 昇(20回生)

師走半ばの土曜日、約20名の参加者を得て、「エルミタージュ美術館展」を鑑賞した。これまでの鑑賞会は、県立美術館学芸員の説明付きという設定だったが、この度は、趣向をかえ、前日の開会式に先立って、重顔の巨漢マトヴェイエフ副館長の講演を聞いた。

エルミタージュ(正式名に「美術館」はつかない)には、300万点を超える収蔵品があり、現展示品を見るだけでも45年はかかると言われる。今回の企画展は絵画が少なく、エルミタージュの基礎を築いたエカテリーナ一世の身の回り品が中心だった。贅を尽くした黄金の馬車や、女帝の寵愛を受けた諸侯からの贈り物が、ブランド愛好家の方々の興味を惹き、13万人に昇る記録的な集客を達成したという。

広島県でも、今年度、ヨーロッパ絵画を中心にしたハイレベルの企画展の開催に向け、エルミタージュ側と交渉を進めている。かつて物議を醸した分館誘致を政策目標とすべきか否か、交渉過程や展示会の内容成果を見極めて判断するという前提になっている。

分館とは、建物というよりも、絵画、音楽、オペラ、バレエなど、ロシアの世界的レベルの芸術文化を広島が日本に導入し、また、第二次大戦で80万人の犠牲者を出したサンクトペテルブルグと広島が、共に世界平和を希求していく機能を備えることではないか。混み合う館内をオリブ会のメンバーの方々と歩きながら、エルミタージュ分館、いや「国際平和芸術文化センター」が実現する日は遠くないのかも知れないと感じていました。当時、私はまだ26歳位で、

広島県でも、今年度、ヨーロッパ絵画を中心にしたハイレベルの企画展の開催に向け、エルミタージュ側と交渉を進めている。かつて物議を醸した分館誘致を政策目標とすべきか否か、交渉過程や展示会の内容成果を見極めて判断するという前提になっている。

とは言い、一昨年は、地元広響や和太鼓の林英哲はじめとする交流ミッションをロシアに派遣し、昨年は、エルミタージュ専属オーケストラを招いて、エリザベト音大や尾道の国宝伽藍でコンサートを開いた。ロシアと広島との芸術文化交流は、既に始まっている。

無事大役が果たされるよう頑張ります。広島オリブ会も今年で二十一年目を迎えますが、設立間もない頃、第一回が第一回に私自身一度参加しました。当時は郵便貯金ホールで開催され、先輩方はそれぞれに再会を喜び、あちらこちらで談笑の輪が広がりに、大いに盛り上がっていた様に記憶しています。当時、私はまだ26歳位で、

先輩達の為の会か?と少し冷めた感じがありましたが、昨年約19年振りに参加させていただきました。当時とは異なり、母校が同じという共通の話題(学生時代の恩師や同級生の動向、高2の時にみんな喜んでカブの初優勝など)に花が咲き、時が過ぎるのも忘れ、あつと言つ間に総会終了の時間になっていました。



21回目の総会 お世話します 25回生 箱田安正

総会最後には、日頃は歌う事もない校歌を、先輩、後輩の皆さんと一緒に大きな声で歌うことができ、とても楽しい一時を過ごさせていただきました。オリブ会の会報を読みますと、本部はもろろんの事、東京支部でも関西支部でも、活発な取り組みが報告されています。